慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	バタイユの『C神父』に描かれる恍惚の諸場面についての考察
Sub Title	Une étude sur les scènes d'extase dans L'Abbé C. de Georges Bataille
Author	市川, 崇(Ichikawa, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.56, (1990. 1) ,p.137- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00560001-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バタイユの『C 神父』に描かれる恍惚の諸場面についての考察

市川　崇

1950年に Editions de Minuit から出版されたこの『C 神父』[1] には様々な恍惚の場面が描かれている。筆者はここで，そこにおいて主体の通常の思考，反省能力乃至は自制心の混乱或いは喪失が多少とも明らかになっていると思われる場面を恍惚の諸場面と呼ぶことにする。筆者はバタイユがこの作品の外部で(主に『有罪者』,『内的体験』,『ニーチェについて』,『エロチスム』,『至高性』，等の理論的著作において) その体験に与えている説明をこれらの諸場面に単に当てはめ解読するのではなく (無論それらの説明は参照されるが)，まず作品内に偏在する恍惚の諸場面のそれぞれにおいて，何或いは誰との(そして自己との)どんな関係において恍惚 (恐怖，幸福感を伴った自制心の喪失) が体験されているのかを見ることによって，バタイユにとってはおそらく唯一の体験であった(それが非-知と呼ばれる以上，幾つかの非-知と言うことは出来ないと言う意味で)はずの恍惚が，体験の主体を，彼がそれに捉えられる時に，様々な仕方で照らし出していることを見ることが出来るだろうと考える。

さてこの『C 神父』内に描かれるこれらの恍惚の諸場面の何れにも，死，女性，類似，裏切りと言うテーマのどれか一つが(或いは複数が同時に)現れているのを見ることが出来る。従って筆者はこれらのテーマを手掛かりにそれぞれの場面での主体の意識を見て行くことにする。

まず死のテーマが現れる場面の内で第二部 Récit de Charles C. の第一章 Eponine の次のパッセージに注目しよう。

J'imaginai les conséquences d'un glissement : le monde dérobé dans un vide, brusquement le fond ouvert. Je pensai à identité du cri que j'allais pousser et d'un silence définitif.[2]

泥酔した挙句に彼の情婦 Eponine とのデートの約束を果たすべく，双子の兄弟である Robert が司祭をする教会の塔の強風に揺れる梯子を，Robert に付き添われながら Charles は上っていく。酒による酔いと高所の与える恐怖の中で，死は主体 (Charles) 自身の実際の死の可能性として感じられ，主体に恐怖を与えると同時に魅惑してもいる様に思われる。この Charles の中に現れた微かな自己破壊の衝動は，一旦 Robert によって妨げられた後 («L'abbé, d'en bas, me tenait la jambe.——Ne va pas, me dit-il, te tuer dans l'église.»)[3]，突然 Charles を襲う幻想の中で Robert に対する破壊の願望に重合わされる。

. . . Tout à coup, je le (Robert) vis, d'où j'étais : gisant sur un remblai de mâchefer, qu'enlaidissaient l'herbe et les fleurs des champs .....
.....
.....
...J'étais suspendu sur le vide à l'échelle. Je vis mon frère agonisant entouré de bourreaux en uniformes : la fureur et la suffocation mêlées, une impudeur illimitée de cris, d'excréments et de pus . . . La douleur décuplée dans l'attente de brutalités nouvelles . . . Mais dans ce désordre de sentiments, c'était ma pitié pour l'abbé qui frappait : je suffoquais moi-même, je frappais, et ma chute dans la tour faisait de l'univers un abîme vertigineux . . .[4]

このパッセージは『C 神父』発表の前年である 1949 年に出版され，『C 神父』の第二部第一章及び二章にほぼ見合う内容を持った小説『エポニーヌ』にも現れているのだが，その前後の語りの簡素でリアリストな調子に対しある種の不協和をもたらしており（高所の恐怖や泥酔だけではこの幻想の出現を説明し切れない様に思われる。），また第五部で初めて明らかに

されるゲシュタポによる Robert の拷問及び死のイメージに奇妙に結びついてしまうことで Charles の語りの真正性を壊してしまうのにも関わらずここで用いられている点から(この点に関する唯一の納得の行く説明は，Robert の逮捕及び死の原因を作ったのは自分だと言う Charles の罪悪感の反映を見ることで可能になるが，語りの真正性に疑問が生じてしまうことには変わりない。)，筆者はここに Charles を Robert に繋ぐ関係の重要な要素を見ることが出来るのではないかと考える。

ところでこの場面の冒頭，即ち Charles の物語全体の始まりにおいて Robert は Charles の言葉によれば，limite つまり境界乃至限界として求められていた。«Je n'ai plus de limite plus de borne. . .J'ai besoin de toi, besoin de l'homme de Dieu.»[5] 無論この言葉は酔って足下の覚束ない Charles を Eponine の持つ塔の上まで連れて行って欲しいと言う懇願の文脈の中で発せられ，実際に，上に我々が見たように，Charles が墜落の危険から Robert によって救われると言う事実によって裏付けられもするのであり，この意味で Robert に対する Charles と Eponine の企みを巧妙に隠蔽しているのだが，同時に比喩的な仕方で Charles の根本的な欲求そのものを明らかにしてはいないだろうか。つまり，Robert＝limite は Charles を危険から守り，荒れ騒ぐ Charles の欲求に歯止めを掛け得るからこそ呼び求められているのだが，同時にキリスト教司祭として Charles 達が身を委ねている放蕩を咎め，退ける立場にある Robert は，Charles 達にとって誘惑し辱めることで乗り越えるように誘わずにはおかない limite でもあるのである。更に他の関係においてならば無視し，避けることさえ容易であるような対立する Robert の立場は，二人が双子の兄弟であることを考える時，Charles にとって自己の前に立ちはだかる limite としての性格を強めていると言うことが出来るだろう。

さてここで再び梯子の上で不意に Charles を捉える幻想を振り返って見ると，奇妙なことに Charles は憎しみによって，Robert を苦しめている死刑執行人に自己を重ね合わせているだけではなく，同時に Robert を憐れんでいるのであり，つまり打っている者に対してだけではなく打たれ

ている神父にも自己を同一視しているように思われるのである。この奇妙な現象は，兄弟を繋ぐ愛情の両義性によってでは説明し尽くされないように思われる。またこの場面で再三現れる二人の立場の逆転(入れ代わり)についての描写は[6]，この幻想と共に Charles-Robert の特殊な関係に光りを投げ掛けている。

この limite とそれを破壊しようとする衝動の衝突，死の中にその破壊の完成，解消を求めていたこの二つの力の対立は，性的な快楽を希求する衝動と，神父に体現されるその禁止，拘束との対立でもあった。この対立は既に第二部二章の最後，Eponine の半裸の肉体を前にした Robert の祈りの場面にその強度の表現を持っていたが，第二部九章 La grand-messe に描かれるのも正にこの対立である。教会の最前列に陣取った Eponine, Rosie, Raymonde (娼婦達)を前に神父 Robert はミサを挙げようとする。塔の上での事件の結果，Robert は Eponine に対する自身の性的欲望を最早否定しようとはしないのであるから («Tu n'es pas étonné de me voir incapable à la fin de déguiser davantage.»)[7]，対立は同時に神父の内面における対立でもあるだろう。そしてここでも二つの力の対立，衝突の結果である神父の祭壇からの転落は死のイメージを喚起している。

> Sensiblement, la lumière de la grâce, malade et sainte, éclairait le visage de mon frère : cette pâleur de mort avait qelque chose de surnaturel, . . .[8]

そして Robert を包む死のイメージはこのミサで事件に続く彼の衰弱によって一層強められ，Charles を始めとして誰もが間近に迫った Robert の死を疑わない。Charles は双子の兄弟を連れ去ろうとしている死を自分の死であるかのように感じ («Comme si la mort inévitable de mon frère était le dédoublement——et l'emphase de ma propre mort !»)[9]，Eponine に対する性的衝動の中で，最早苦痛ですらあるような過度の性的快楽の中で Robert の死に追いつこうとする。«Je compris lentement que j'allais bouger, m'en aller et retrouver un corps dont les turpitudes me rendraient

d'ailleurs à une équivalence de la mort»[10] そしてこのすぐ後の Eponine の部屋での場面において女性のテーマが死のテーマに結びついているのを見ることが出来る。

> Je m'étendis nu auprès d'elle. A la faible lumière d'une lampe voilée, j'avais le sentiment que l'on a dans les chambres des mortes . . . Eponine prit plaisir à un demi-sommeil, où elle me dit, ouvrant à demi les yeux :——Encore . . . Fais comme si j'étais morte . . .[11]

Elisabeth Bosch はこのバタイユにおける性と死の問題，二つのテーマの結び付きに関して次のように語っている。«Pour lui (Bataille) l'instant de l'amour s'apparente à celui de la mort, " petit mort " " et mort " se repondent, joie et douleur, joie et horreur sont inséparables. Aussi, à l'instant oú, dans le texte de Bataille, des personnages surgissent qui sont objets du désir érotique, nous trouvons très souvent, juxtaposée, l'évocation de leur décomposition. Le mouvement inverse se trouve également : la vue de la mort ou d'un mort excite et exalte le sujet ou les personnages.»[12] 確かに Bosch の指摘するようにバタイユの作品の中においては，しばしば性の描写は死のイメージで結び付けられている。『我が母』における毒を飲んだ Hélène と Pierre の性交の場面，また『空の青』における墓を見下ろす高所での Dirty と Troppmann の場面を思い起こしてもいいだろう。そして，我々が上に見たように，この場面において Charles は Eponine の肉体に死の等価物を求めている。しかし Bosch がこの後，我々が上に見た Eponinee の部屋における「死の擬態」の場面を例として挙げ，こう結論する時，筆者は若干の議論の必要を感じるのである。«Ainsi eros et thanatos sont étroitement unis dans ce roman de Bataille. Le moment du plasir se trouve doublé de celui de la mort qui l'illumine de sa force aveuglante. On peut évidemment qualifier ce phénomène de nécrophilie . . .»[13] フロイトにおけるエロスとタナトスの説明を完全に一義的に規定することは危険が伴われるように

思われるが[14]，ここでバタイユにおける性と死のテーマ結びつきを考えるためにあえて危険を犯すならば，エロスとは有機体において生の継続を強いるものであり，所謂性本能をその代表としており，フロイトは二個の胚細胞を融合へ駆り立てる力を例に挙げている。これに対して死の本能とは無生の状態を回復しようと求めるものであり，破壊衝動であり，サディズムがその代表として挙げられている。勿論フロイトにおいてもこの二種類の本能は様々な割合で混合していることが認められているが，（破壊衝動がエロスに奉仕すると言う具合に）根本的には両者の関係は対立なのであり混同は認められないように思われる。また自我も無意識同様にこれら本能の影響下にあるのであり，本能が常に意識されているとは言えないと言うことを付け加えることが出来るだろう。さて上に引用した「死の擬態」の場面において Charles は明らかに意図的に死を求めている。そして死体のように振る舞う Eponine の肉体を求めるのである。しかしこのことからただちにエロスとタナトスの結び付きを仮定することが出来るのだろうか。もしタナトスと言うことでフロイトの言う破壊衝動を意味するのであれば，通常の性行為においてこの衝動はエロスに奉仕しているのであるから，意図的に死を望む必要はない筈であり，またもしタナトスで無生の状態を回復しようと言う衝動を意味するのであれば，わざわざその対立物であるエロスの助けを求める必要があるのだろうか。（フロイトは性行為における両者の結び付きに関して，個体の内にエロスが起こした緊張から解放されようとして死の本能が働くと説明するのであって，死の本能の働きを助けるためにエロスが働くとは述べていない[15]。）Charles の欲求は始めから矛盾したものであり，それは死そのものでもなければ（もしそうなら自殺をこそ選ぶべきだろう），単なる性的な快楽でさえない。あえて誤解を恐れずに言うなら，それは正に不可能であるにも関わらずエロスとタナトスを完全に結び付けること，生を完璧に享受しつつ死のうとすることであるだろう。Bosch の説明は，この不可能なものであり，正にそれだからこそ希求されている両者の結び付きを，確認され得る事実として提示してしまっている点で筆者は不充分であるように思われる。Bosch が仮定する

“ petite mort ” と死の結び付きは，Charles 自身によって不可能であると打ち明けられる。«l'ennui venait de l'impossibilité d'unir pleinement les moments extrêmes, le plaisir et la mort : même alors qu'il s'agit de la «petite mort», les deux phases s'ignorent, elles se tournent le dos.»[16]

さて如何にそれが不可能であるとしても Charles が求めているのは，生を十全に享受しつつ死ぬことであり，そのためには実際の死ではなく意識の死に手段を求めるしかないだろう。この意識の死はどうすれば可能になるだろうか。上で考察した場面におけるように意識的に死を求めることによってでも，死体を真似ることによってでもなく，反対に死を恐怖することによってではないだろうか。死の恐怖が意識されることによって，破壊に対する抵抗が一旦措定され，同時に激しい性的な衝動が自己の内部において意識に対する破壊的な力として感じられもする時，性的な快楽は単なる快楽ではなく，激しい意識の引き裂き，死として体験されるのである。「死の擬態」の場面におけるのと同様に，Eponine の部屋で翌日 Charles と Eponine は怠惰な快楽を貪り合っていた。けれども彼らの居る部屋の外で足音が，次いで囁きが聞こえる時，前日窓の下に残されていた saleté が嫉妬に逆上した残念な Henri の脅迫としての意味を持ち始め，彼らは死の恐怖を味わうことになる。そしてこの死の恐怖が «tension» を高め，激しい意識の引き裂きが可能になる。

> Elle mordit si cruellement ma lèvre, et elle jouit si fortement de sa peur que j'eus moi-même un désir cruel. J'eus un mouvement de violence calculée : mon corps se tendit au dernier degré de la tension. Il n'est pas de bonheur plus voluptueux qu'en cette colère à froid : J'eus le sentiment que la foudre me déchirait et que son éclatement durait, comme si l'immensité du ciel le prolongeait.[17]

勿論ここにおいて死の恐怖は意図的に探し求められたものではない。しかし彼ら二人ともこの Henri による死の恐怖を，意識の引き裂きのため

に利用していることが分かる。取り分け Charles は自己を破壊される者として感じると同時に，破壊者にも自己を同一視しているようである。こう考えて見ると先の「死の擬態」の場面に欠けていたのはこの死に対する恐怖であると言える。間近に迫った Robert の現実の死の可能性の前で，Eponine の死は単なる遊戯に過ぎず，恐怖を引き起こすには至らない[18]。或いは Charles が，酩酊と疲労，激しい眠け，によって衰弱しすぎていることによって，死＝破壊に対して既に充分な抵抗が失われているために意識の引き裂きが体験されないと言うことが出来るだろう。

では次に，上で分析した諸場面において既に死のテーマに結びついて現れていた女性のテーマを再び取り上げてみよう。一般にバタイユの小説世界においては女性に，導く者，秘密を伝授する者としての特権的な役割が与えられていると考えられている。『眼球譚』においても話者を挑発し，新たな性的冒険に誘うのは常に Simone であった。また『エドワルダ夫人』においては，この Madame Edwarda は話者を導いて行くだけではなく，更にこう語っていた。«Tu vois, je suis Dieu. . .»[19] そして Denis Hollier は，この『エドワルダ夫人』の 1956 年の再版の際に，Pierre Angélique の自伝の一部として書かれた『我が母』についてこう述べている。«*Ma Mère* commence avec la mort du père. Cet événement, qui satisfait apparemment le fils autant que sa mère, est le point de départ de l'initiation du narrateur au savoir que détient sa mère et qui fait d'elle l'objet de ses désirs et de son respect.»[20] Hollier の指摘の通りこの『我が母』における母，Hélène は «Qu'en sais-tu», «Je veux que Pierre le sache. . .» などの言葉によって「知」と言う形式において Pierre の欲望を導いて行く。そして，Hollier は，この母の savoir における知と快楽との結び付きに触れ，この母を Madame Edwarda に近づけている。««Dieu, s'il "savait" serait un porc.» Ma mère, puisqu'elle sait, est un porc.»[21] この Hollier が引用している「もし神が知っているなら．．．」は言う迄もなく『エドワルダ夫人』の中の言葉である。

ここで筆者は『C 神父』における女性（とりわけ Eponine）の役割を考

える上で重要であると思われる，Madame Edwarda の «Tu vois, je suis Dieu» と言う言葉を，Hollier の二つの作品の結び付けを参考にすることによって解明して見たい。«Dieu, s'il "savait" serait un porc.» と言う『エドワルダ夫人』の中の言葉は Hollier がそうするように肯定的に捉えられるべきなのだろうか。つまり「知っている神」，「下司」であるような神の肯定なのだろうか。Hollier はおそらくそう考えているようである。但し «savoir» と言う語を通常の意味とは違った意味に，『我が母』に関して彼が指摘していたように快楽から分離されていない特殊な「知」と取ることによって。しかし我々は『エドワルダ夫人』の同じパラグラフ内でこの «savoir» と言う動詞が次のように用いられているのを見るのである。«Ma vie n'a de sens qu'à la condition que j'en manque ; que je sois fou : comprenne qui peut, compreme qui meurt . . . ; ainsi l'être est là, ne sachant pourquoi, de froid demeuré tremblant . . . ; l'immensité, la nuit l'environnent et, tout exprès, il est là pour . . . «ne pas savoir».»[22] つまりここでは神に見捨てられた人間の「無知」そのものが肯定されているように思われる。従って人間の無知を超越した全知の神は否定されなければならない。だからと言って勿論先の «porc» を神に向けられた単なる罵りの言葉と理解することも出来ない。Pierre Angélique が自ら付した注にも見ることが出来るように[23]，この言葉は結局「神が知っているとしたら，それは通常人が神について想像するような姿においてではなく，それ自身空虚へと開かれた恍惚の中にある者のようにしてである。」と言う意味ではないだろうか。

従って，Madame Edwarda が «je suis Dieu» と言う時，それは人間の「無知」を超越した神なのではなく，認識を逃れ，恐怖を与えるような「意味の不在」の中にあくまで踏み留まるものとしてそうなのである。バタイユ自身が『エドワルダ夫人』との深い繋がりを認めていた[24]，『内的体験』において神は次のように説明されていた。«Dieu ne trouve de repos en rien et ne se rassasie de rien. Chaque existence est menacée et déjà dans le néant de Son insatiabilité. Et pas plus qu'il ne peut

s'apaiser, Dieu ne peut savoir (le savoir est repos). Il ignore comme il a soif.»[25] このような「休息することのない」「飽和することのない」「無知」であるような神とは，正に未完了な運動体として宇宙そのものとさえ言い得るだろう。意識にとって死であるような，絶体的引き裂き，意味の不在を「抽象的直接性」として意味付け認識へと取り込むことなく[26]その不在に留まることでこの未完了な運動体に参与しており，話者 Pierre をもこの体験へと導こうとすることで『我が母』の Hélène は Madame Edwarda 同様神と呼ばれるのである[27]。それではこの Hélène, Madame Edwarda のようなバタイユ的聖女を我々は，『C 神父』に見出すことが出来るだろうか。

Michel Surya はこう語っている。«Il y avait eu Simone, Dirty, Edwarda, Marie. Eponine fait maintenant partie de la légende des saintes batailliennes.»[28] また «Est-ce parce que Bataille prévoyait que *Ma Mère* serait le dernier de ses récits, ou pensa-t-il qu'il fallait donner, de Simone à Eponine, un modèle, une initiatrice? Toujours est-il que Hélène, la dernière des saintes qu'il va créer, sera de toutes celles qui l'ont précédée une sorte d'archétype. . .»[29] と。また Elisabeth Bosch はバタイユの小説作品群の中にバタイユ的聖女の系譜を辿ってはいないが，『C 神父』内の女性の役割に注目し，Germaine, Eponine, Rosie は全て(無論程度の差はあるが)挑発し，禁止されているものへ導き，「不可能なもの」の秘密を伝授すると語っている[30]。Surya, Bosch 何れの指摘もある意味で妥当であり，しばしば錯綜した物語りを読み解く上で，我々に貴重な手掛かりを与えてくれている。とりわけ Surya の指摘は筆者が上で『エドワルダ夫人』，『我が母』に関して確認した事実と大きく矛盾するものではない。けれども彼らが根拠にしているように『ハレルヤ，ディアヌスの教理問答』や『エロティスムの歴史』においてバタイユが，体験を描く上で女性に特権的な役割を与えているとしても，女性の形象を用いずに体験が説明されることもまた多いのであり，更に一面において作品理解の助けにもなる典型の抽出は，共通点の強調と微妙な差異の隠蔽に頼らざ

るを得ないものである以上，しばしば作品の個別性を捨象する危険を伴いもすることに留意する必要があるだろう。

第一部 Récit de l'éditeur に登場する Germaine は，そこにおける編者の体験に対して確かにある役割を担っていた。しかし彼女は編者を挑発し，彼を性的な興奮へ導くとしても（禁止されているものへ導く）としても，秘密を（Hélène や Edwarda が保持していたような）伝授する存在ではない。編者が意識された反発の裏で彼女とある種の共犯関係を結び，彼女の渇きに共感するとしても，筆者の目に彼の体験にとって大きな意味を持つと思われるのは，Charles の目を意識することで強められた自制心と性的な興奮との対立であるように思われる。では Rosie と Raymonde はどうであろうか。この二人はミサの場面に Eponine と共に登場していた。しかし，先に我々が見たように彼女達は Robert の内面における緊張関係を引き起こしてはいても決して大きな役割を果たしているとは言えないのである。彼女達，そして取り分け Rosie が Robert に働きかけ，大きな影響力を行使するのは第四部 Notes de l'abbé C. の中の la conscience においてである。この部分で Rosie は明らかに命令し，導き，秘密を教えようとする者である。彼女が «Qu'il est beau, qu'il est sale de savoir! Pourtant, je l'ai voulu, à tout prix j'ai voulu Savoir!», 或いは «C'est de SAVOIR que je sue l'obsénité, c'est de SAVOIR que je suis heureuse.»[31] と言う時，彼女は Hélène や Edwarda のように静態的概念による把握を逃れる，「死」であり「絶対的引き裂き」としての「知」について語っていると考えられる。但し忘れてはならないのは，ここに現れている Rosie も Raymonde も，神父のノートに付された Avant-propos de Charles C. の Charles の次の言葉が明らかにしているように Robert の空想の産物に過ぎない。«Il s'agit bien entendu de pure rêverie. Robert fut l'amant de Rosie, et de Raymonde en seconde lieu, mais la Rosie de La Conscience ne ressemble en rien à la fille assez molle qu'il aima.»[32]

それでは Eponine は，この『C 神父』の前身とも言うべきである 1949

年の作品のタイトルであり，Surya がバタイユ的聖女の列に加えている Eponine は，Charles にそして Robert にとって「神」であるだろうか。確かに Eponine は Charles によって «déesse mauvaise» に譬えられ，塔の上で神父を前にした時 Charles はまた，自身と Eponine を「怪物」にまた「悪魔」に準えている。けれども第二部一章，二章の塔の場面において Eponine の存在感は実は絶大であるとは言えないのではないだろうか。この場面において Eponine は何もしないのである。裸体をマントに包み挑発的な薄笑いを浮かべて佇む他は。そして瀆聖行為の完遂も風の力による偶然のものであり，彼女の意志によるものではない。勿論ある意味でこの Eponine の無為を，その潜在的な力の大きさの表現と解することも不可能ではないが，全く反対に，性的な衝動に対立する極，即ち神父が体現する聖性が余りにも繊細な(従って，見る角度によっては曖昧な)ものとして喚起されてしまっているためにそれを穢すには過激な性的行為などは必要なく，一個の半裸体の現前で充分であると解することも出来る。そして Charles の側からある種の屈折した共感に支えられたこの繊細な聖性に対する瀆聖の成就は，やはり教会の壮麗さによる祝福を要請し，Eponine 自身はその卑俗さの故に排除されかねない。(«Eponine évoquait l'accordéon, mais la pauvreté des musettes, ou du music-hall où elle chantait, me semblait dérisoire à la mesure d'un triomphe si certain. Une église entière aurait dû tonner d'un bruit d'orgue et des cris aigus du choeur si la gloire qui la portait était dignement célébrée.»[33])

Madame Edwarda も Eponine 同様に娼婦であり，卑俗な印象を与えない訳ではない。『我が母』の Hélène も決して上品な女性とは言えない。けれども彼女達には或る揺るぎなさと言ったものがあり，Pierre に恐怖を与えずにはおかない。これに対して『C 神父』においては，第二部の話者 Charles が，自身が手を貸している瀆聖の対象である神父に両義的な愛を持っており，神父と教会の聖性が部分的に共感に支えられているために(この共感は神父の内面における瀆聖を Charles が感じ取り，語るために不可欠であり，双子の兄弟と言う設定は正にこの意味で有効である)，

Eponine の脅威と魅力が弱められざるを得ないと言うことが出来る。

しかし他方，Hélène や Edwarda と比較した Eponine における迫力の乏しさは，Charles と Robert を繋ぐ関係の特殊性にのみ起因している訳ではない。Eponine 自身が Robert に対する自己の絶対的優位を確信出来ずにいるのだ。ある日それまでは性的遊戯のパートナーであった Robert に無視されてから (Edwarda や Hélène が無視されたりしただろうか)，聖女であった Eponine は卑俗な娼婦に失墜してしまった。従って，今度は神父を誘惑し，汚すことで失った聖性を奪回しなければならない。勿論彼女もまた秘密を保持し，その「知」を Robert に伝授したがっている。«——Robert, disait-elle, ne peut rien savoir. Je veux qu'il sache, tu comprends » しかし Hélène との類縁性を強く感じさせるこの言葉も，続いて愚かで一途な娘と言う印象を呼び寄せてしまう。«Il ne sait rien d'une fille aussi raide que moi !»[34] そしてここで苛立つ Eponine を描写する Charles の言葉は興味深い。«. . .elle voulait de l'abbé qu'il la reconnût, qu'elle existât enfin pour lui. . .»[35] この一見何気ない表現はバタイユにおいては無視し難いコノテーションを持っている。バタイユは『至高性』において自らこの «reconnaissance» と言う語に注を付け，次のように述べている。«J'emploie toujours les mots *reconnaître* ou *reconnaissance*, non dans le sens de la gratitude, mais au sens hégélien. Pour Hegel, ce qui n'est en nous que dans la mesure où cela nous apparaît tel, n'est vraiment qu'à partir du moment où les autres le *reconnaissent* pour tel.»[36] ごく僅かの例外を除いて生涯ほぼ全面に讃えていたニーチェと違って，ヘーゲルに対するバタイユの態度は両義的である。「意識の引き裂き」の体験に関しては Jacques Derrida が論じているように，バタイユはヘーゲルに倣って「死」，「直接性」を説明しながらぎりぎりのところで袂を分かつことによって，ヘーゲルが結局「抽象的否定性」として認識の内に取り込んでしまう「死」のもとに留まろうとしていた。けれども精神現象学の中の主人と奴隷の弁証法に関してはバタイユは絶賛を惜しまないのである。[37] 精神現象学の B，自己意識の A. 自己意識の自立性と非自立

性，主と奴によれば，人間が自然状態から脱して真に人間的となるためには，自己意識が即自且つ対自的に存在しなくてはならないが，これは他者の自己意識に対して即自且つ対自的に存在することによってである。«La Conscience-de-soi existe en et pour soi dans la mesure et par le fait qu'elle existe (en et pour soi) pour une autre Conscience-de-soi ; c'est-à-dire qu'elle n'existe qu'en tant qu'entité-reconnue.»[38] つまり出会った二つの意識は動物のように単に欲望することではなく，相手に欲望されることを欲望することによって真に人間的な存在になろうとするのである。そのために死を賭した闘いが始まる。そして死を恐れた方が相手による承認 (*reconnaissance*) を締め，相手を承認し，奴隷となるのである。さて Charles によれば，Eponine は Robert による承認を求めている。Robert に対して存在することを (exister pour lui) 求めている。このことはつまり，ヘーゲルの思考に倣えば，Eponine は Robert に対して未だ主人ではないと言うことを意味するであろう。しかし承認されることを締めた訳ではないから，奴隷であると言うことも出来ない。

ところでこの Eponine の側からの承認を求めると言う欲求が，Robert にも同様に分かち持たれているのかどうか，従ってヘーゲルにおける二つの意識間のように Eponine と Robert の関係がシンメトリックなものであるのかどうか問うて見る必要があるだろう。Robert は Eponine を避けようとするのだから承認を求めているとは考えられない。そしてまた塔での事件の後 Eponine に対する欲望を認めているのだから，この逃避を恐れによるものだと解することも出来ない。しかしまた Eponine の部屋の前に夜毎現れることが示してるように Robert もまた彼女に執着していることは確かである。Elisabeth Bosch はバタイユの多くの小説に共通して三人の主要な登場人物が描かれると言う事実に注目し，この『C 神父』にも同様な構造が見出されると指摘している[39]。なるほど『眼球譚』における話者-Simone-Marcelle,『我が母』における Pierre-Hélène-Réa,『エドワルダ夫人』における Pierre-Edwarda-Chauffeur などを取り出すことが出来るし，この作品に関しても，第一部の Editeur-Germaine-Charles

第二部の Charles-Eponine-Robert, 第四部の Rosie-Robert-Raymonde と言う三者関係は明らかである。そして Bosch はこの三人の関係に対するバタイユのこだわりの理由をキリスト教の三位一体やタントラ教などに尋ねた後に，第四部において Robert が自ら名乗る Chianine を Charles と Eponine の合成ではないかと推測している[40]。これは非常に示唆に富んだ指摘であり，これを参考に筆者は次のように考える。つまり双子の兄弟である Charles に Robert が自己を同一視することは比較的容易に想像できるが(我々は既に死のテーマに関して Charles の側からの同一視に注目した)，Robert は Eponine にもまた自己を同一視しているのではないかと。Journal de Chianine においては二度迄も彼＝Chianine と Eponine との同一性が述べられている。男性 Robert の女性 Eponine に対する同一視とは余りにも突飛な推測のようにも思えるが，筆者はこれを所謂性倒錯と違った角度から説明することが出来る。バタイユは『ヘーゲル，死と供犠』と題された論文において，供犠における犠牲を捧げる者の死を被る獣に対する同一視について語っている[41]。そしてこれは正に「意識の死」の体験，我々が「死の擬態」の場面に関して見たように，生を十全に享受しつつ死ぬと言う不可能な体験に避けられない「ごまかし」についてバタイユが与えている説明なのである。Robert は窓の下で(排泄行為をしながら) Charles に抱かれる生贄＝Eponine に自己を同一視することで，不可能な「死」の体験を求めていたと言える。(Henri の脅威のもとで Eponine を抱く Charles もまたこの供犠の図式に従っていたことは既に見た通りである。また Chauffeur に抱かれる Edwarda 見つめるタクシーの中の Pierre にも同じことが言えるのではないだろうか。)

では類似と言うテーマを見てみよう。この双子である Charles と Robert の外見上の類似は，第一部における編者の取り違いが物語っているように，おそらく完璧なもので第三者の目には同一人物であると言う印象を与えずにはおかない。またこの類似は単に外見上のものに止まらず，Charles は再三 Robert と自身との内面的な同一性をも打ち明けている。従って遊蕩児 Charles にとっては取り澄ました Robert のカトリシズムは

自己の存在を否定されることでもあるだろう。それゆえ Robert に対する瀆聖行為は同時に Charles にとって自己同一性の回復と言う意味を持つ。我々は先に塔に上る梯子の場面での幻想の中に現れた Charles が神父に対してと同時に，死刑執行人に対しても自己を同一視していることに注目した。このことから筆者は Charles の神父に対する瀆聖行為は積極的には Charles の自己同一性の回復劇であり，他方，limite としての Robert と自己との関係を同一視によって心理内部に取り込むことによって，対立する力の衝突が Charles の内面にも起こっていると考えるのである。塔の上で瀆聖劇は完成した。或いは少なくともその場に立ち会った Charles にはそう信じられたし，その事件を境にした神父の急激な性格の変化はその確信を強めるだろう。そして神父はそれまで避けていた Eponine の部屋の前を通過する。しかし真の意味での瀆聖の完遂，即ち「Eponine と寝ること」を約束させようと出掛けて来た Charles を Robert は拒絶する。但し最早神父は Charles や Eponine の放蕩を軽蔑する立場にはいないことを打ち明けながら。«Tu n'es pas étonné de me voir incapable à la fin de déguiser davantage.»[42] そして二人の一致が再び確認される時，Charles は攻撃性を失う。対立が破壊された以上何を攻撃し，否定出来るだろう。しかし対立の中に自己の位置を持っていた Charles にとって，相手の完全な否定に行き着かない対立の解消は同一性の回復を意味しない。反対に Robert と別れ，その結果 Eponine とも別れた Charles は自分の場所を失い彷徨うことになる。一方 Eponine はそんな生温い対立の解消には満足しない。そして我々が上に確認した新たな瀆聖劇が準備される。我々はこの先にこの場面を塔の上でのそれと同じ，最前列に陣取る Eponine 達娼婦に代表される性的なものの力と，神父が体現するそれに対する limite との衝突の過程であると分類した。しかし実はこの場面には三通りの解釈が成り立つのである。まず参列していた信者や尼僧達による「奇跡」が起こったと言う解釈 (Charles や Eponine 達までが一時的にこの解釈に従っている)。そして神父は Eponine 達の誘惑の力に抗し切れずに卒倒したと言う解釈。そしてこれに加えて，Charles にだけ第三の決定

的な解釈の可能性が与えられるのである。気を失っている筈の神父が密かに Charles の腕をつねることによって。しかしこの神父の行為を判断することは Charles の力を超えており，彼は驚き，混乱し，恍惚を体験する。«stupéfait, je sentis un pincement à l'avantbras. J'avalai ma salive et ne bougeai pas. . . L'aurais-je imaginé? Je n'osé croire être joué comme je l'étais. . . jamais je n'éprouvai de sensation plus bizarre : elle tenait du ravissement, de la honte et même du vice. Je tremblais au milieu du choeur : rien n'était plus voisin du désordre ou plus précisément de la volupté des sens.»[43] ここで Charles が体験している恍惚は明らかに対立する力の衝突が引き起こすものではない。我々はこの場面に裏切りと言う最後のテーマを見るのである。まず神父のしたことを解明しよう。我々が上に確認した性的な力と limite との対立は嘘だったのだろうか。そうではない。ただその対立が神父の内面において上演されていると言うことであろう。神父は最早キリスト教の神など信じていない。そして最後の務めとして引き受けたミサにおいて，参列者達の目に自分が体現している敬虔な神父と言う形象を，正に見られていることによって意識し，性的なものを排除する極を再び強め，それを目の前にいる Eponine へと向かう性的な欲望に衝突させることで恍惚を獲得していたのである。内面における瀆聖と言う意味では塔の上での場面と同じであるが，ここでは Robert は遥かに意識的に神父を演じているのである。Robert は Charles と Eponine そして信者達を騙したのである，«Le pincement voulait dire qu'il trichait. . .»[44] Charles は茫然自失しながら漸く事態を飲み込む。Robert の信仰が偽りであったことを。しかし Robert の信仰の偽りの告白によって，Charles は Robert を自分と同じ平面上に，つまり信仰を持たず性的な快楽を求める者として，見出した訳ではない。反対に Robert と言う人間の徹底的な「不在」を見出したのである。塔の場面での瀆聖に関して我々は，同一視によって Robert と同様に Charles の内面においても瀆聖が行われていたことを明らかにした。しかし今や二人の瀆聖は決して同じではなかったことが明らかになる。何故なら塔の場面では（そして

ここでも Eponine は尚) Charles も Eponine も Robert の信仰を疑ってはおらず, つまり内面化される性的なものに抗する極は, 目の前のその存在を信じている神父の形象を反映させるだけで良かった。確固たる聖性を破壊しさえすれば良かったのである。これに対して Robert はその破壊される聖性の極それ自体を虚構し作り出していたのである。Robert を追い詰め, 破壊しようとする Charles や Eponine の瀆聖は, ある意味で確固とした聖性としての Robert の自己同一性に依存していたと言える。Robert は今や, 信じてもいない神を, 自分が体現している聖性を快楽を引き出す為の道具として利用する怪物である。狂人でさえあるかも知れぬこの怪物の前では Charles も Eponine も全く子供じみている。«En un sens, j'admirais mon frère, il m'humiliait et m'enchantait (Eponine, sur la tour, n'était près de lui qu'un enfant), mais je crainis sottement pour sa raison.»[45] 我々は先に Charles の瀆聖行為は彼を否定する Robert を否定することによる, 自己同一性の回復劇だと言った。今 Robert の「不在」を前にして Charles はその自己同一性を取り戻しただろうか。ある意味でこの回復の可能性は, Robert を否定すると言う身振りに懸かっていた。従って否定する対象の完全な「不在」を前にして Charles もまた足場を失って転落するしかない。但しここで Charles が体験する崩壊は, どんな意味でも否定の, 破壊の身振りとは無関係な, 意図せざる崩壊であり, 不思議な幸福感を伴っている。そしてこの Robert の「不在」は Charles にとって裏切りでないとしたら何であろうか。

この場面の後 Charles は Robert の狂気と衰弱による死の可能性を心配する。そして腕をつねったその意味を尋ねる Charles に Robert はやは答えようとはせず, その代わりにもう一度二人の一致, 「共犯性」を告げる, «Nous ne différons guère l'un de l'autre et mon amitié pour toi est aussi grande que ton amitié pour moi. . . Pour être sûr d'une complicité aussi grande, il me faut me taire.»[46] 確かに腕をつねることで Robert が Charles に伝えた何か, 神なき瀆聖行為のもたらす快楽は言葉による理解などではなく共犯性としてのみ十全に伝えられ得るものであろう。こ

の二度目の別離の後，激しい腹痛の発作を訴える Robert を見て Charles はいよいよ Robert の死を確信する。しかしこの確認された一致は，その死の懸念と共に再び裏切られるのである(もっとも Robert の発作が仮病ではないかと言う可能性は暗示されているが)。Eponine の窓の下を通過し saleté を残して言った人物が凶暴な Henri ではなく，死にかけている筈の Robert であることが明らかになることによって。そしてここでは Robert の裏切りは宇宙に，静態的な概念による把握を逃れる，同一性を裏切り運動する宗宙に比せられる。«En tout ce qui venait d'arriver, il y avait une renversante simplicité. Je le savais : mes angoisses ou les mines de Robert étaient un jeu· Mais comme je dormais à demi, je cessai de faire une différence entre une simplicité qui me renversait et la conscience d'une immense trahison. Je l'apercevais soudain : l'univers, l'univers entier, dont l'inconcevable présence s'impose à moi, était trahison——trahison prodigeuse, ingénue.»[47] 教会での転落の場面で Robert が体験する恍惚とそのすぐ後で Charles が体験するそれとが必ずしも同じ過程を経ていなかった様に，ここでも瀕死の筈の Robert の soutane を闇の中に見た Charles が味わう恍惚は Robert の体験しているそれとは，違った過程を辿るだろう。Robert は「神無き瀆聖行為」をある意味で更にエスカレートさせるだろう。soutane を着たままで Eponine の窓の下で排泄行為をすることで，自身の内部に新たな limite を打ち立てると同時にそれを侵犯するのである。(Le journal de Chianine の中の crime はこの排泄行為を指しているように思われる。) 一方 Charles は，死にかけていると思っていた Robert が不意に現れるのを目にし，彼が通常の人間の羞恥心と言う最底の limite を犯すことまでして恍惚を求めているのを知って，一つの世界が崩壊して行くのを感じる。Charles の前で，秩序立った，道徳の支配する世界が，彼が依存していた Robert の聖性，そして人間性と共に崩壊し，けれども Charles はその代わりに jeu だけが支配する，無邪気で無秩序な，裏切りとしての世界を，半睡状態の幸福感のうちに見出している。またここでの Charles の恍惚も limite を侵犯す

る過激さによって生み出されるものではない。最後の裏切りは，「最愛の者への裏切り」である。この裏切りはどんな意味でも政治的なものではない。おそらくここでもやはり Robert は新たなそして最後の limite を見出し，引き裂いている。最早神も信ぜず，羞恥心さえ棄てた Robert が，尚自己に同一性を保証している limite を持つとしたらそれは，彼を Charles や Eponine に繋ぐ愛情であるだろう。そしてこの最後の人間的なものを(例え無意識にではあっても)破壊することで，Robert は「裏切り」としての宇宙，「神」たろうとしたのである。

さて以上のように，死，女性，類似，裏切りと言うテーマを手掛かりに『C 神父』内に描かれる様々な恍惚の場面における主体の意識を分析した結果，激しい性的な衝動と，これを押し止め，排除しようとする limite との対立する運動を取り出すことが出来た。そして，この運動は，他者の視線を意識することによって，また性的な快楽に対立する聖性を体現する神父に自己を同一視することによって，更には死の恐怖を感じることで常に意図的に引き起こされていることが明らかになった。そしてこうして対立する二極間の緊張を殊更高め，衝突させることによって主体が体験しようとするのは，十全に生を享受しつつ死ぬと言う，「意識の引き裂き」であると言うことが出来る。結局，あえて単純に過ぎる図式化の危険を恐れずに言うなら，この作品の登場人物達はこの「意識の引き裂き」の体験において，Madame Edwarda や『我が母』の Hélène が Pierre を導こうとした，「飽和し休息することのない」，バタイユが「神」と呼び「連続性」と呼ぶ，常に未完了な運動体としての宇宙へと参与しようと望んでいると言い得るのではないだろうか。

しかし他方意識的な limite の措定とその破壊乃至侵犯だけが，この運動体への接近を可能にする訳ではないことも我々は確認することが出来た。ミサに続く Robert の偽りの卒倒の場面及び，第二部最終章において，瀕死である筈の Robert が闇をかけて行く場面における Charles の体験する恍惚がそのことを教えてくれる。それを破壊し引き裂くまでもなく limite であった筈の Robert の同一性は，自ら滑り出し，Charles を裏切

り，奇妙な幸福感を生産しながら失われて行く[48]。バタイユはこの limite と見えたものの，破壊によらない，思いがけない滑走と消失の効果を「ルアー」(疑似餌) の効果と呼ぶだろう。けれどもまたバタイユは，侵犯によるものであろうと，「ルアー」によるものであろうと，この体験を La Souveraineté と呼ぶことを躊躇わない。«Pourquoi ne pas dire plus précisément que ce leurre enivre, que cherchant à ne pas être leurré, j'évite une possibilité qu'ouvre le leurre et que ferme la vérité... Car le leurre reconnu est à l'objet vulgaire,——à la table, et à la loi et aux êtres qui sont ce qu'ils sont——, ce qu'est le crime à la servitude, la souveraineté à la prison ou la volupté au travail.»[49]

NOTES

1) この *L'Abbé C.* には 1949 年に同じ Editions de Minuit から出版された前身とも呼べる作品，*Eponine* がある。Gallimard 社の全集の編者はこの *Eponine* を *L'Abbé C.* の第二部一章，二章の variantes として全集第三巻の Notes に収めている。しかしこの Notes は *Eponine* と *L'Abbé C.* 第二部一章，二章間の差異を網羅しているとは言えず，筆者は二つの textes 間の差異を検証することによって，*Eponine* は単に第二部一章，二章に止まらず *L'Abbé C.* のそれ以外の部分で発展を見ることになる多くのイメージを萠芽として含んでいることを確認した。
2) O.C. tom 3, P. 257.
3) O.C. tom 3, P. 257.
4) O.C. tom 3, P. 257.
5) O.C. tom 3, P. 256.
6) 例えば，苛立つ Eponine の呼び掛けに «Patience, nous montons» と答えるのは Charles ではなく Robert であり，Charles は Robert の腕に身を委ねながら反対に自分こそ Robert を抱えて梯子を上る筈だったとぼんやり考える始末である。
   O.C. tom 3, P. 258.
7) O.C. tom 3, P. 278.
8) O.C. tom 3, P. 292.
9) O.C. tom 3, P. 302.
10) O.C. tom 3, P. 308.
11) O.C. tom 3, P. 308.
12) Elisabeth Bosch, *L'Abbé C. de Georges Bataille, les structures masquées du double*, P. 37.

13) Ibid. P. 39.

14) 周知のようにフロイトにおける生の本能と死の本能の定義は，「快感原則の彼岸」(1920) と「自我とエス」(1923) ではかなり異なっている。「快感原則の彼岸」において外傷性神経症患者に現れる反復強迫を説明するために考えだされた死の本能は，そこでは元の状態を（究極的には無生の状態を）回復しようと言う本能として示され，以前から（「本能とその運命」1915）性的本能に対立するものと考えられていた自我本能，自己保存本能までもがこの死の本能に結び付けられていた。しかし自我が実際にはリビドーの備給を受けていることが明らかになったことにより，「自我とエス」においては反対に，自己保存本能は生の本能に帰せられている。

15) 「もしフェヒネルのいう恒常原則が生命を支配するなら，生命は死に至る滑走になるのであるから，衝動欲求として現れて水準の低下を食い止め，あらたな緊張をみちびきいれるのは，性衝動，すなわちエロスの欲求であろう。エスは...エロス的緊張によって飽和しているような性的物質を放出することで身を守る。」「自我とエス」，人文書院フロイト著作集 6, P. 290.

16) O.C. tom 3, P. 309.

17) O.C. tom 3, P. 319.

18) Bosch が指摘していた nécrophilie に関しては，1943 年に Louis Trente のペンネームで出版された *Le Petit* において «Je me suis branlé nu, dans la nuit, devant le cadabre de ma mère.» O.C. tom 3, P. 60. と表現される他，*Le Bleu du ciel* にも，variante を見ることが出来る。これがバタイユの実際の性癖とどの程度呼応するのかは不明であるが，少なくとも作品内においては，死体そのものを愛することと言うよりも，むしろ死体が引き起こす恐怖が問題となっていると言うことが出来る。

19) O.C. tom 3, P. 21.

20) Denis Hollier, *La prise de la Concorde*, P. 288.

21) Ibid., P. 289.

22) O.C. tom 3, P. 30.

23) O.C. tom 3, P. 31.

24) バタイユの *Madame Edwarda* への序文の草稿の中に次のような文章が見出される。«J'écrivis ce petit livre (*Mme Edwarda*) en septembre-octobre 1941, juste avant Le Supplice, qui forme la seconde partie de *L'Expérience intérieure*.. Les deux textes, à mon sens, sont étroitement solidaires...» O.C. tom 3, P. 491.

25) O.C. tom 5, P. 121.

26) *Madame Edwarda* の巻頭には次のようなヘーゲルの言葉が掲げられている。«La mort est ce qu'il y a de plus terrible et maintenir l'oeuvre de la mort est ce qui demande la plus grande force.» O.C. tom 3, P. 9. ヘーゲルはまた精神現象学のこのバタイユの引用に続く部分で，やはり「死」を迂回するのではなく，それに対峙することにこそ精神の偉大さを見ている。しかしそ

れはこの死を「抽象的否定性」として意味付け，止揚することによってなのだ。(ヘーゲル哲学に関してバタイユに多大な影響を与えた A. Kojève は aufheben に supprimer-dialectiquement を当てている A. Kojève, *Introduction à la lecture de Hegel*, P. 540, Gallimard. 1947.)

27) «La mort à mes yeux n'était pas moins divine que le soleil, et ma mère dans ses crimes était plus proche de Dieu que rien de ce que j'avais aperçu par la fenêtre de l'Eglise.» *Ma Mère*, P. 40. collection 10/18, union générale d'édition.

28) Michel Surya, *La Mort à l'oeuvre*, P. 392. Librairie Séguier, 1987.

29) Ibid., P. 422.

30) Op. cit., P. 71.

31) O.C. tom 3, P. 353.

32) Ibid., P. 337.

33) Ibid., P. 263.

34) Ibid., P. 273.

35) Ibid., P. 273.

36) O.C. tom 8, P. 292.

37) *L'Expérience intérieure* においてバタイユはヘーゲル哲学の中のこの主人と奴隷の弁証法に触れながら，次のように述べている。«Personne autant que lui (Hegel) n'a étendu en profondeur les possibilités d'intelligence.» O.C. tom 5, P. 128.

38) A. Kojève, Op. cit., P. 16.

39) Op. cit., P. 68.

40) Ibid., P. 69.

41) O.C. tom 12, p. 336.

42) O.C. tom 3, P. 278.

43) O.C. tom 3, P. 292.

44) O.C. tom 3, P. 298.

45) O.C. tom 3, P. 293.

46) O.C. tom 3, P. 301.

47) O.C. tom 3, P. 322.

48) この leurre の効果を最も明快に説明しているのは，第二部六章 la simplicité の冒頭における Charles の夢想ではないだろうか。そこでの対象 «le bonheur parfait» は最初は高速で走る自動車であったが，いつの間にか対象は自動車自体ではなく，それの与える追いつけないと言う感覚にすり替えられている。つまり「完璧な幸福」を手に入れるためには，一旦は leurre であるものを真剣に追い掛け次いで，それに裏切られ，振り切られなければならないと言うことではないだろうか。O.C. tom 3, P. 275.

49) O.C. tom 3, P. 559.